

GOD EATER～神々の黄昏～

ヤトガミ・レイナ・マリー・エクセリア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦2066年 一つの家族が二人の男達の策略によつてバラバラにされ、少年は全てを失つた

西暦2067年 山の奥地に住んでいた親子はアラガミによつて娘は目の前で母親を失つた

西暦2071年 とある姉妹は一人の少女を気にかけていた……妹と少女は同じゴッドイーターだつた……だが、男達の策略により、妹は全てを失い、姉と少女は切り離され、少女は再び孤独となつてしまふ

一度、全てを失つた少年と二人の少女は想いを爆発させ、想いを力として万物を超え、具現する。

彼等を待つてゐるのは破壊か平和か……

ゴッドイーター～神々の黄昏～始まります

目 次

全ての終わりと全ての始まり	1
極東の地	6
彼らの帰還	11
新人でも無い新人	15
彼らの神器I	19
彼らの神器II	23
衰えた少年	27
ヴァジュラ	30
蒼穹の月	35
六芒星	39
具現武装	43
復帰	46
アリサとユウの特訓 I	52
アリサとユウの特訓 II	56
この間入ったばかりの新人二人は数日でベテランになつてました	61
少女と名前と重荷	65
パーティー	69

少女と名前と重荷

パーティー

61

全ての終わりと全ての始まり



西暦2066年 ロシア支部 郊外

この日…ロシア支部 郊外の一件の家から出火した…それは偶然ではなく一人の少年を殺すためある男達に仕組まれた物だつた
その少年が全てを知るのは五年後…すべての始まりの年…西暦2071年…大切な親友を殺されかけてからだつた

西暦2067年 そうひようのきょう蒼氷の峡谷

雪に覆われた廃墟…アラガミが出現する前まではダムとして機能していたのかこの廃墟はアラガミ装甲壁と同じかそれ以上に巨大で分厚かつた…が、今ではダムとしての機能は無く…アラガミの巣窟となっていた

「クチュン…何時来てもここは、寒いな…」

アラガミの巣窟…そうひようのきょう蒼氷の峡谷に独り…銀髪・サファイアのような透き通った青色の眼をした少年が巡回しているに近いアラガミ達に見つからないように隠れながら目的地までゆっくりと進んで

いた

『おかあさあん!』

「ツ!」

隠れ歩いていた少年は女性の叫び声を聞いて足を一瞬止めると直ぐに走り出した

「!」

数分走った少年が見た光景は……黒髪の少女が泣きながら倒れている女性を揺すつていた……

「…………ヨシノさん!?」

少年は倒れていた女性の顔を見たことがあつた…………香月ヨシノこうづき
……四年前の20063年にM作戦行動中行方不明I Aとなつていると情報端末『ノルン』に記載されていたからだつた

そして、さらに厄介な事に……情報端末『ノルン』にも記載されていなかつた、新種の大型アラガミ群が少女とヨシノに集まつていた
「…………」

少年はこの世界では珍しいリボルバーを片手にゆつくりと歩いていく…………コツ、コツ、コツと音を立て歩いていく

その場の何もかも時が止まつたように動かなく、泣いていた少女ですら、時が止まつたように泣き止み動かなかつた

「…………消えろ」

少年は少女達に近い六体のアラガミに向かつて引き金を引いた

「…………大丈夫だ……もう、大丈夫だよ」

それから……数分、少年は少女の前に片膝を地面に付け、少女を強く抱きしめていた……少年の後ろには数十体のアラガミが絶命していた

「…………お母さん…………うわあああああああああああああん!!!!!!」
抱き締められて いる少女は再び泣き出してしまった

「…………辛いよな…………本当に辛いよな…………今は泣きな…………大切な人を失う

辛さは俺もよくわかってる…………だから、今はお泣き…………お兄ちゃん
が…………これからは守から…………君のお母さんに誓つて守から…………」

少年が少女に優しく声をかける中…………少年の後ろから…………先程、少年
が倒したアラガミと似たアラガミが複数、ゆっくりと近づいていた

「…………」

「…………いつちゃやだよ」

少年が立ち上がりアラガミの居る後ろを向いて歩こうとする 少

年の服の袖を少女が掴み離そうとしなかつた

「大丈夫だよ…………お兄ちゃんはどこにも行かないよ…………必ず戻るから
待つててね」

少年は少女の頭を撫でながら優しく言うと少女の手を袖から離してアラガミの方に歩きだした

「…………俺はもう、後悔はしたくない…………去年のあの日からそう……
だつた…………大切な…………幼なじみの心を助けられなかつた…………それが…………
それが一番の後悔だ…………」

少年は少し低いトーンで語り始めた

「お前ら…………アラガミに語つても仕方ないだろうな…………」

少年の手には何時の間にか剣先が金色に輝き、柄は漆黒の黒が覆う
大剣が収まっていた

「全てを…………終わらせよう…………奏でて見せろよ…………終焉の歌…………」

少年が大剣を一振りすると蒼氷の峡谷は光と闇の渦に呑まれた

そうひょうのきょうごく



西暦2071年 極東東部

「……ふわあああ～」

少年は車の荷台で目を覚ます。ゆっくりと起き、目を擦りながら外を見るが見えるのは岩や砂だけ…すると、助手席から黒髪で髪で作られてるであろう猫耳、白いノースリーブにピンクのカーディガンを着た少女が顔を出した

「おはよう！お兄ちゃん！」

「…おはよ、ナナ。」

助手席から顔を出した少女の名は…呪神ナナ…旧姓香月ナナオオカミ…四年前、少年…今では兄のように慕つて…いる少年…呪神ヤマト…旧姓旧名、ヤトガミ・レイナ・マリー・エクセリアに助けられてから直ぐに引き取られ、今は運転席に座るもう一人の計、三人でこの先の支部に戻る途中だった

「おはよう、ヤト！よく寝てたね？」

「おはよう、おーちゃん。少し、夢を見てたんだ……ナナと初めてあつた日の夢をね……」

「……そなた…あ！見えてきたよ！」

車の空気が一瞬重くなるが運転席に座る銀髪でナナと同じく白のノースリーブに肌色のカーディガンで黒のワンピースの少女…：おーちゃんことオレーシャ・ユーリ・エヴァ・ハザロヴァが正面に見

えた巨大な壁に持ち前の元気で意識を向けさせた

「ヤト……あそこにあるんだよね？」

「うん……間違いないよ。あそこに俺たちの絆と平和を奪つた元凶が……そして……直にあーちゃんも来る筈だし……あの腐った野郎も来るはずだ……」

「……藪医者：彼奴は何が何でも殺す……」

ヤマトとオレーシャは目の前に見える壁の中にいる『奴』に向かつて強く殺氣を放っていた

「……お兄ちゃんもお姉ちゃんも怖いよ……」

その場にいた、ナナはヤマトとオレーシャの殺気に涙目になつてい
た

「……ごめん、ナナ」

「……ごめんね、ナナちゃん」

「……うん！お兄ちゃんもお姉ちゃんも笑顔がいいよ！」

二人が頭を撫でながら謝るとナナは笑顔で喜んでいた

「……待つっていてあーちゃん……必ず助けるから……」

ヤマトは荷台の椅子に座りながら遠くを見ながらつぶやいた

「ヤト、なんか言つた？」

「お兄ちゃん、なんか言つた？」

「うんん、何でもないよ」

そのつぶやきは誰にも聞こえず、言つた、ヤマトの心の底に刻まれるだけだった

続く

極東の地

◇ 西暦2071年 極東支部

この日……大きなアラガミ装甲壁に囲まれた東の最端に位置する元日本……現在のフェンリル極東支部の中心建つ建物……通称アナグラは別の幌ただしさに包まれていた

「おい、『彼奴ら』が帰ってきたってほんとかよ!?」

「ええ！ 本当にみたいよ！」

「早く、見に行こうぜ！」

男女問わず、アナグラ内を走り、この極東支部に戻ってきた „彼ら“ を出迎えに動いていた

「どうしたの？ みんな、こんなに幌てて……」

そんな中、黒短髪の女性と茶色い服を着た男性、紺色のフードを被り、紺色のコートを着た男性がエレベーター降りてきた

「リンドウさん、ソーマさん、サクヤさん、ミッショーンお疲れさまです」

その三人に受付の赤い髪の女性が声をかけた

「……ヒバリ、何があつたんだ？」

紺色のコートを着た男性……ソーマさんと呼ばれた男性が受付の女性……ヒバリと呼ばれた女性に現在のこの、見幕について聞いてきた

「あ、はい。数分前のことです、ヤマトさんとナナさんが戻ってきたんです！」

「「?!」」

ヒバリの言葉に三人は驚愕してしまう……三人とも……いや、この極東支部の一部を除き皆、ヤマトとナナの存在は大きかつた

「五月蠅いぞ！ 一体何の騒ぎだ！」

別のエレベーターからどなり声とともに黒髪で白い服を着た女性が降りてきた

「あ、ツバキさん！ 実はですね、ヤマトさんとナナさんが戻ってきたんですよ！」

「……………そ…う…か…：：ア…イ…ツ…等…が…な…：：ヒ…バ…リ…、皆…に…伝…え…て…お…け…：“ほ…ど…ほ…ど…に…して…お…け…と”…な…」

「了解しました」

ヒバリにツバキさんと呼ばれた女性は少し笑みをこぼすとエレベーターに乗り、どこかに行つてしまつた

◇

対アラガミ装甲壁を超えて内部居住区を車で進むヤマト達…

「お兄ちゃん！ 私たち、戻つてきたんだね！」

「…………ナナ…………そ…う…だ…な…！ 僕達は帰…つ…て…これ…た…ん…だ…よ…」

助手席に座るナナの喜びの声に複雑な顔をするヤマト……だが、ナ

ナの笑顔には勝てず、この一時だけは目的を忘れ楽しもうとした

「……おーちゃん、初めての極東はどうかな？」

極東支部に入つてから運転を変わり、後ろの席に座るオレーシャに運転しながらヤマトが聞いた

「ロシアとあんまり、変わらないかな…………でも…………ここが最前線だつてわかる…………数ヶ月でも私は【G O D E A T E R】だつたんだから…」

⋮

オレーシャはどこか悲しそうに…そして、どこか懐かしむように外を見ていた…………でも、外部居住区に住む住人を見ると微笑んでいた

だが…………この一時の平和は爆発音と共に消え去つた

「老朽化してたはずの第八外壁が破壊されたのか……おーちゃん、ナナ…………どうする？」

「もちろん、私は行くよ…………この極東支部には初めてくるから……私

には関係ないと言えれば……そう、かもしれない……でも、私は戦うよ……
そのためにここまで来たんだから」

「私も戦うよ、お兄ちゃん……そして、守るよ。戦えない人たちを……」

「……フフツ……そうだな」

ヤマトは微笑んでから車を発進させた

時は少しだけ遡り、第八外壁 近郊

「……みんな酷いよ……エリックがいなくなつたつて……」

顔を俯かせながら第八外壁近郊の狭い路地を一人、黒い服を着た少女がとぼとぼ、と歩いていた

「エリック……私のこと……嫌いになつたのかな……」

少女に優しく、何時もいろんな物を買ってくれていたエリック……エリック・デアリ・フォーゲルヴァイデ・彼はここ極東支部の【GOD EATER】だった……だつたとはつい先日、彼は任務中に戦死……この世から去つてしまつていた……その事は少女にも伝えられていたが……少女は彼の死を受け入れることができていなかつた……

「……ナナちゃんもヤマトお兄ちゃんなどどこかに行つちやつていないし……独りぼつちは……やだよ……」

少女の目から大粒の涙が一滴、零れ落ちる……と、同時に直ぐそばで爆発音と共に何かが崩れ落ちる音が聞こえた

「キヤアアア！」

少女は爆発音と何かが崩れ落ちる音に驚き、尻餅をついてしまう「いつたいなに……アラガミが壁を破壊したの？」

少女の頭に過ぎつたのはアラガミによつてアラガミ装甲壁が破壊して外部居住区に侵入している、というもの……

「早く……逃げなきや……あれ……足が動かない」

少女はこの場から逃げようとするが尻餅をついた影響か、足が動かなかつた…

「ガアアアアツ！」

「ひい！」

アラガミの雄叫びを聞いた少女から悲鳴がもれ、少女は必死に立とうとするがピクリとも足が動かない…すると、少女の耳に足音らしき音が聞こえて少女の顔は恐怖に包まれていく…

「グルルルルツ」

「ひい！」

建物の影から出てきた足音の正体は一本足で頭が白い物に覆われた化け物…二匹のオウガテイル…アラガミの中で最も数が多いアラガミだつた

「いやだ…来ないで…来ないでよ…」

二匹のオウガテイルは少女にゅつくりと近づいていく…少女は泣きながら必死に立とうとするが変わらず立ち上ることはできなかつた…

「誰か…助けて…助けてよ…エリック…」

少女は亡きエリックに助けを求めるが…エリックは助けに来ない…二匹のオウガテイルが少女を補食できる距離に後、一步の所で建物が崩れ落ち一台の車が二匹のオウガテイルを当て飛ばした

「ナナとおーちゃんは少女を安全な場所に！それから、リック力を持つてきたコアを！こいつらは俺がやる！」

「わかつたよ、ヤト！」

「わかつたよ、ヤマトお兄ちゃん！」

ナナとオレーシャは二匹のオウガテイルをヤマトに任せて少女の方に向かう

「君、だいじよ…て、エリナちゃん!?」

「ナナちゃん…？ナナちゃん…うああああああああ！」

少女…エリナは助けられたのと目の前の親友ナナにあえて溜まつていたのが一気に押し寄せてナナの胸で泣きじゃくる

「よしよし、怖かつたね…もう大丈夫だよ…後は安全な場所に向か

うだけだからさ」

そう言うとナナはエリナを抱きかかえて車に入り、オレーシャも運転席に座り、車を発進させて中心部に向かつた

「さて……俺の妹分を泣かせた罪は重いぞ?…」

車を見送ったヤマトは一人、オウガテイル二匹に静かだが激しい殺氣と冷たく凍り付きそうな鋭い目を向けた…

「……絶望のこの世を果てさせろ…世界!」よのほて

ヤマトが唱えるように叫ぶと青白い光と共に右手に封印されるよう大きな鞘に収まってる刀が現れ、握られていた

「……果てる!」

「グガアアアアアアアアア!!」

ヤマトはオウガテイルが捕らえきれない程、早く動きオウガテイル一匹に鞘に収まつた状態で【世界】を上段から振るうとオウガテイルの頭をかち割り叩き潰してしまつた……そこで、漸くもう一匹のオウガテイルがヤマトを捉え、補食しようと口を開き襲いかかつてくるが…

「……らあ!」

ヤマトはオウガテイルが届く前に下段からクリティカルヒットさせた……ヒットしたオウガテイルは装甲壁にぶつかり、地面に落下する……体は潰れ絶命していた…

「こいつらは本職に任せるとして……」

ヤマトは絶命したオウガテイル二匹に背を向け、歩いていった

続く

彼らの帰還

極東支部 食堂

「先日の防衛戦成功とヤマト、ナナの帰還に乾杯！」

「「「乾杯!!!」」」

ヤマトヒナナの帰還とオレーシャが初めて極東支部に来たのと第八アラガミ装甲壁が破壊され、アラガミが外部居住区に侵入した翌日……第一部隊隊長 雨宮リンクドウの音頭で食堂にてパーティーが行われていた

「しつかし、お前が戻つてくれて助かつたぜ！しかも、複数の新種コアのお陰でその日の内に装甲は治せて整備班も喜んでいたぞ？」

「被害が少なくてよかったです。集めていたコアもリツカに渡す予定だつたので……でも、助けられなかつた命も沢山……ありました」

「あく、やめやめ！せつかくのパーティーなんだから、湿っぽい話はなしだ！」

「あははは、 そうですね」

リンクドウはそう言うと別のグループに行つてしまふ……ヤマトは辺りを見渡すと先の防衛戦で助けた少女・エリナと話すナナの後ろ姿を見つけた

「やあ、ナナ。エリナちゃんは久し振りかな？」

「ヤマトお兄ちゃん！」

後ろからヤマトが声をかけるとナナとエリナは凄い勢いで椅子から降りてヤマトの前まで来た

「ヤマトお兄ちゃん……あの……そのね…エリックさんのことなんだけど……」

「うん…昨日、ツバキさんから聞いたよ…エリックのこと……」

ナナが聽きずらそうにヤマトにエリックのことを聞いた

エリック……エリック・デアリフオーゲルヴァイデとはヤマトも顔見知りで良く、妹の事で話をしていた事もある仲であった……ヤマ

トは彼の死を昨日の内に極東支部教官の雨宮ツバキから聞かされていた

「ごめんね、エリナちゃん……そんなときに側にいれなくて……」

「…………うん、心配してくれてありがとう、ヤマトお兄ちゃん……ナナちゃんも……一人のお陰で少し……元気になれたと思う……それに、エリックの事も……大丈夫……多分……でも、今回で決めたことがある……聞いてくれるかな？」

悲しそうに話すエリナ……だが、その瞳には小さな体には大きすぎるほどの覚悟が写っていた

「私……【GOD EATER】になる……【GOD EATER】になつてアラガミがいない世界を作りたい！ そうなれば、誰も私みたいに悲しまないし、誰も戦わなくていいはずだから……私は……もつと、強くなりたい！」

「いい覚悟……うん、俺から言えば、良い意志だ……その、意志を……想いを忘れないで……その、想いがいつか具現するときが来るからさ」

決意を……意志を現すエリナ……ヤマトはエリナの頭から帽子越しに撫てる

「…………うん！」

エリナはわけがわからなそうだったが笑顔で頷き、ナナと一緒にパーテイーに戻つていった

「護らないとな……彼奴の為にも……」

「そうだね、ヤト」

エリナの後ろ姿を見ながら呟くヤマト……直ぐに第三者の声が隣から聞こえてきた……ヤマトが顔だけ向けるとそこにはオレーシヤが立つていた

「…………おーちゃん」

「私はエリックって人は知らないけど……エリナちやんだつけ？ エリナちゃんの想いはよくわかるよ……私も似たような経験があるから……だから……」

オレーシャはロシア支部にいたころの事を思い出して顔を俯かせ

てしまう……

「護ろうね！」

オレーシャは精一杯の笑顔をヤマトに向けた……ヤマトは笑顔につられて微笑んだ

極東支部 ラボトリ

「やあやあ、久し振りだね」

「そうですね、サカキ博士」

パーティーの後、ヤマトは一人、ペイラー・サカキの研究室に来ていた

ペイラー・榎……フェンリル極東支部の技術開発部門を統括するオラクル技術研究者でアラガミ研究の第一人者であり、オラクル細胞の技術利用を可能にした【偏食因子】の発見者……簡単に言えば全神機の生みの親なのである

「まずは、礼を言うよヤマト君。君やナナ君、オレーシャ君の活躍で被害は最小に止められた、ありがとう」

「よしてください、博士。ここは俺にとつて、第二の故郷でツバキさんや博士は俺の命の恩人なんです。故郷であり、恩人がいる……この場所を護るのは当たり前です」

礼を言う博士にヤマトは“当たり前”と答える……そんな、ヤマト

にサカキ博士は残念そうな顔をしため息を吐いた

「“アレ”を使う前の君はもう少し喜怒哀楽や考え方が豊かだつたんだがね」

「……壊世錫杖レクイエム……俺が初めて具現武装として具現した武器ですね」

壊世錫杖レクイエム……四年前にヤマトがナナを救つた時に初めでヤマトが具現した武器だつたが……具現されたレクイエムの力が

強すぎ、具現した代償としてヤマトは【自分のために感情を出しにくくなつた】のだ

「それで、サカキ博士……今回、呼んだのはどういう理由ですか？」

「おつと、そうだつたね。本題に移らせてもらうよ……ヤマト君……君達……

【GOD EATER】になる気はないかね？」

運命の歯車が回り始めた

新人でも無い新人

極東支部 ラボトリ

「やあ、待っていたよ」

翌日……ヤマトはオレーシャとナナを連れてサカキの研究室に来て いた。

サカキ博士に【GOD EATER】にならないかと誘われたヤマト達は1日考える時間を貰え、こうして再びサカキ博士の研究室に答えを伝えるために来ていた

「早速、本題に移らせてもらいますが……三人で考えた結果……俺達、三人は【GOD EATER】にならせていただきます」

「本当かい!? それは、よかったです……でも、一つだけ聞かせてほしい……なぜ、ここ極東支部で……いや、君達の敵のいる支部で……【GOD EATER】になると決めたのだい?」

サカキ博士は喜ぶが直ぐに疑問をヤマトにぶつけてきた
「簡単なことです、サカキ博士。敵の直ぐ側に隠れて後ろから狩る【GOD EATER】としてでもそうでもなくとも戦う事ではもつとも良い戦術ですから……」

サカキ博士の間にオレーシャが口を挟む、この問いと答えがわからぬのはナナだけだった

「セイ!」

サカキ博士の研究室を後にしたヤマトは訓練所で一人、ダミーアラ

ガミを“世界”で切り刻んでいた……ヤマトの右手には今朝まではなかつた赤い腕輪がついていた

『そこまで!』

上から女性の声が聞こえ、ヤマトは声に従い“世界”を消して深呼吸をした

『剣術は申し分ないな…』

「ありがとうございます、ツバキさん」

『基礎体力なども、十分と言える……だが、精進を忘れるな』

「わかつています」

『ならば、いい……これにて訓練を終了する』

「ありがとうございます」

◇極東支部 ヤマトの部屋

「…………ただいま」

ヤマトは訓練所から真っ直ぐ、割り当てられた部屋に戻ってきた……ナナとオレーシャの部屋は両隣なので真っ直ぐ戻って来ても問題は無かつた

「……」

ヤマトは戻ってきてから直ぐに部屋の変化に気がついた……誰も居ないはずの……何もおいていないはずのベッドが膨らんでいた

「……おーちゃんもナナも何してるんだ?」

「……あははは、バレちゃった?」

「……てへへ、バレちゃった」

掛け布団を剥がすとオレーシャとナナが顔をほんのり赤くして丸まっていた

「それで、どうしているの？」

「ヤトと一緒に居たくて…来ちゃつた」

「オレーシャお姉ちゃんと一緒で、ヤマトお兄ちゃんと一緒に居たくて…来ちゃつた」

オレーシャとナナは可愛く甘い声で言つてきた…ヤマトは軽く溜め息を吐いた

「…はあ…今度からは普通に待つていて…色々と…な」

「はーい」

二人とも反省の色を見せてい無いことにヤマトは大きなため息を吐くしか無かつた

◇贖罪の街

建物が並び立つ廃墟街…建物には大なり小なり穴が空いていた
勿論、人の気配など無く、あるのは獲物に飢えて周回する無数のアラガミと武器を持たずに佇む、少年と少女二人だけだつた…

「よお、新入り…でも、無いか…」

少年少女達の後方から大きなチェーンソーのような武器…神機を担いだ青年が歩いてきた

「まあ…一応、僕達は新人扱いなので…新人扱いでお願ひしますね、リンドウさん」

青年…リンドウにナナ、オレーシャは苦笑いしており、ヤマトはいつも通りに受け答えをする

「…」

「?どうかしましたか?」

「あ…いや、なんでもないが…ヤマト…お前、何か変わったか?」

受け答えに疑問を感じたのかリンドウはヤマトを見つめていた

…

「……そうですね……変わったと思います……僕の運命を知つた……から、ですかね」

ヤマトの答えの意味を知らない、リンドウは首を傾げ、ナナとオレーシャは俯いていた

「そ、それより、早く実地訓練を始めようよ！リンドウおじさん！」

「……そうだな……命令は三つ、【死ぬな】、【死にそうになつたら逃げる】、【そんで隠れろ】、【運が良ければ不意を付いてぶつ殺せ】……これじやあ、四つか……」

緊張感無いリンドウにナナとオレーシャは苦笑いするが、ヤマトは気にせずに頷いてから高台から降りていった、ナナとオレーシャも続くように降りていき残されたのはリンドウだけだつた

「……リンドウおじさんか……」

残されたリンドウは先程、ナナのおじさん発言に少なからずショックを受けていた

続く

彼らの神器 I

極東支部 エントランスロビー

ヤマト、オレーシャ、ナナが極東の【GOD EATER】になつて一週間……ヤマト達、三人は見る見るうちに【GOD EATER】として力を付けていき、既に新人の枠を超えて、下手なベテラン神機使いより強く、ここ最前線の極東支部内の第一部隊、第二部隊、第三部隊の面々に一目置かれていた…………だが、彼らの活躍を良しとしない神機使いも少なからず存在していた

「チイ！ アイツ等、目立ちすぎなんだよ!!」

「こつちの方が先輩なのに生意気なんだよ！」

「神機すら使えない《エセ【GOD EATER】》のくせに!!」
彼らが極東支部を離れていた頃に増えた神機使いから批判されることが多く、また彼らを知る神機使いからも少なからずそのような声が聞こえてたりもするが……

上からそれを見ていた第三部隊の面々は酷く呆れていた

「バカな奴らだ、ヤマト達を妬んでもなにもならない。それをわからぬのか？」

「どーでも、よくね？ ヤマトの事を知らない奴らなんてさ」

「そうね、私はアラガミを打てればそれで、いいわ。でも、彼をああ言えるときは幸せ物よ。アラガミより、恐ろしいあの人の相手にしなくてはならないのだから……」

第三部隊の少年一人、青年一人、女性一人はそんなことを話すと出撃エレベーターに乗りどこかに行つてしまつた……直後、エントランスロビーにヤマト達の文句を言つていた神機使いの悲鳴が響き渡つた

◇ 鎮魂の廃寺

「何時来てもここは寒いね」

「そうだね、おーちゃん。ナナは大丈夫?」

「うん!大丈夫だよ、ヤマトお兄ちゃん!!」

以前は隠れ里として使われていたお寺……今では当時の面影はなく、雪が振りつもり、あちこちにアラガミが捕食または破壊した穴が空いていた……そこに、何時もの服を着た、ヤマト達三人は来ていた……ヤマト達三人の後ろから神機を持った少年が二人歩いてきた

「俺、コウタよろしく!」

「第一部隊所属、神雑ユウです。よろしくお願ひします」

青いジャケットで茶髪の少年……ユウはキツチリとした挨拶をしてくるが黄色と茶色の毛糸のしま帽子を被つた少年……コウタは簡易すぎる挨拶をしてきた

「僕は第六部隊所属の呪神ヤマトです」

「同じく第六部隊所属のオレーシャ・ユーリ・エヴナ・ハザロヴァアです」

「同じく第六部隊所属の呪神ナナでーす」

ヤマト達三人も挨拶を返すとコウタが“ニヤニヤ”と頬が緩んでいた

「チエ……同じ部隊じゃ……『時間です、行きます』……って!おい!」

コウタを無視してヤマトが待機エリアから降りていく……ヤマトに続きオレーシャ、ナナと降りていきユウはコウタに苦笑いしながら降りていった

「まあ……こんな物か…おーちゃん、ナナ大丈夫だった?どこか怪我ない?」

「うん、大丈夫だよ」

「どこも怪我ないよ！」

オレーシャとナナの二人を心配しながら声をかけるヤマトの後ろには中型アラガミグボロ・グボロ2体が倒れ、絶命していた
「……の三人なんなんだよ……無茶苦茶つえーじやん…」

「……だね」

ユウとコウタはヤマト達の強さに驚愕し動搖していた

「それじゃあ帰投……」

『緊急事態です！』

帰投しようとするとインカムからオペレーターのヒバリの荒々しい声が聞こえてきた

「……ちらヤマト……どうかしましたか？」

『緊急事態です！作戦エリア内に中型アラガミが 侵入……待つてください……そんな！作戦エリア内に次々と中型アラガミが侵入してきます！』

「……ちらヤマト……侵入した中型アラガミを視認：コンゴウが集まっています……」

ヤマト達の視線の奥にはゴリラ型のアラガミ……コンゴウが三、四体がいた……

『極致型……』

続々と通常種のコンゴウが歩いていく中には寒い地に適応した白いコンゴウ……コンゴウ墮天種も複数体確認できた

「ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

「……最悪だな」

通常種と墮天種の二種類だけなら……誰もが思つた事だつたのだろう……だが、現実はそう甘くはなく……ヤマト達の目の前に金色のコンゴウ……接触禁種のハガンコンゴウが三体現れた

『現在、第一、第二部隊に救援を要請中……両部隊ともに20分はかかることがあります……』

「チイ……了解しました……」

ヤマトは周りに聞こえないように舌打ちしインカムから手を離し

た

「……ユウさんとコウタ……さんは今すぐに戦線から離脱してくださ
い…退路は直ぐに開きますから…」

「待てよ…この数を三人でなんて無茶だ！俺たちも……「あんた達が
居ても足手纏いなの！」…う」

ヤマトに反論したコウタはオレーシャに怒鳴られて肩身を狭くす
る

「神機に漸く慣れ始めた新兵が居ても足手纏いなの！邪魔なの！敵が
一体で通常種なら話は別だけど今はそんな悠長な状態じやないよ！
私達が囮になつてあげれるから早く逃げなさい！」

「……はいいいい！！！」

コウタは怒鳴るオレ!!シヤに恐怖を覚え少しだけ震えていた

「話は纏まつたな……卑く行け」

「ありがとう……帰つたら奢ります」

ユウはそう言うとコウタを連れて初期の待機エリアに向かつて走
り去つていった

「さて…ゴリラ狩りの始まりだ」

そう言つたヤマトとヤマトの後ろで構えているオレーシャとナナ
の眼の色が赤く染まつていた…

続く

彼らの神器Ⅱ

「さて…ゴリラ狩りの始まりだ」

そう言つたヤマトとヤマトの後ろで構えているオレーシャとナナの眼の色が赤く染まつていた…

◇ 鎮魂の廃寺

「グルルル」

「……ほんと集まりすぎだな」

ヤマト達三人を包囲するようにコンゴウ種が大量に集まつていた
「…でも、私の【誘引】を使つてからコウタやユウさんは無事に戻れ
てるはずだよ！」

誘引…ナナに眠つていた特殊能力で周囲のアラガミのヘイトを
全てナナに向ける事ができる能力なのだが暴走してしまふとどんど
んアラガミを引き寄せてしまう両刃の剣もある

「わかつてるよ、ナナ。さて…ゴリラ共も痺れを切らしそうだし狩
るか」

コンゴウ達は今にでも襲いかかってきそうなほどにヤマト達を睨
んでいた

「……神々を朽ち果てさせろ…世界！」

「……継ぎし者に光の加護を…クラリツサ！」

「……全てを無に帰せ…ラビュリス！」

ヤマト達が唱えると青白い光と共にヤマトの右手に封印されるよ
うに大きな鞘に収まつてゐる“世界”が現れ、ナナの両手にナナの身長

の倍はある両刃斧が現れ、オレーシャの周りにはコアと思われる青い部分の周りにいびつな形の破片が散らばる純白の長杖と純白の長杖と同じコアと思われる紫部分の周りにいびつな形の破片が散らばる禍々しい黒い長杖、そして…流線型の物質が淡く光っている長杖の計三本が現れた

『すごい数だね、オレーシャ?』

「そうだね、シヤオ。でも、関係ないよ…障害になる奴は全て倒すだけだよ」

『それもそうだね、オレーシャ…いや、四代目クラリスクレイス』
「ふふ、それじゃいこうか…ヤトやナナちゃんに任せるのは駄目だからね」

オレーシャが話していた中、ヤマトとナナは目の前のコンゴウ等を根絶やしにしていた

「四代目クラリスクレイス…援護砲撃行きまーす!」

三本の長杖…クラリツサ三本からブラスト使いが放つ“メテオバレット”と良く似た砲撃が放たれコンゴウ達を次々と消し積みにしていき、ヤマトとナナは砲撃を難なく回避しながら次々、コンゴウを狩つていった

「よお、お前ら無事か?」

そのころ、安全エリアに退避していたユウとコウタ達に救援に来た第一部隊と第二部隊が合流していた

「リンドウさん! サクヤさん!」

「……はい、僕達は無事なんですけど……」

ユウが現状説明をしようとしたとき……お寺の奥で爆発音が聞こえその場の全員が振り向くと爆発音がしたところから黒い煙が上がりつていた

「話は後だ、俺達第一部隊は左から進む、第二部隊は右から進んでくれ」

『了解!』

第一部隊隊長のリンドウの指示の下、第一部隊は左の道、第二部隊は右の道から進み始めた

「なんなの……これ?」

左の道から奥に進んだ第一部隊……お寺の奥にたどり着いて直ぐにその場のコンゴウ種の大量の死体に女性スナイパーのサクヤが声をもらした

「……これ全てヤマト達が殺ったのかしら?」

「だろうな……ヤマトたちの戦いが続いているはずだ、行くぞ」

「まつて、リンドウ!」

リンドウ達、第一部隊はヤマトたちを探し更に奥へと進んで行こうとすると、コンゴウが一体、此方側に走つて来るのをサクヤが気づいた

「先にアイツを片づけるぞ! サクヤ、コウタバツクアッP! 俺とソーマで……」

『これで終わり! 三連クラリツサバースト!』

迫るコンゴウを向かいうとうとすると神機を構える第一部隊……すると、声が聞こえて直ぐに迫つてきていたコンゴウに三つの火の弾丸が直撃し跡形もなく消し飛んでしまった

「……い、今のはブラストのかしら?」

「詮索は後だ、ヤマト達を直ぐに探すぞ」

『りよ、了解!』

この後直ぐ、コンゴウの血で血まみれのヤマト、オレーシャ、ナナ
が発見され救助されたのであつた

続く

衰えた少年

◇贖罪の街

「……これでラスト！」

〔グギャアアアア〕

世界と同じ見た目で鞘が青と水色の剣を空からオウガテイルに叩きつけた少年……ヤマトは周りを警戒しながら地面に着地した

「……ふう～」

『『お兄ちゃん！（ヤトーー！）』』

一息付き、世界と類似の剣をしまうと遠くからヤマトを呼ぶ声が聞こえ、ヤマトが振り向くと手を振るオレーシャとナナの姿があつた

〔…此方、ヤマト。これから帰投する〕

『お疲れさまです。お帰りをお待ちしています』

二人に手を振り、イヤホン型通信機で極東に連絡しながら二人の方に歩くヤマト：

ヤマトとオレーシャ、ナナが大量のコンゴウ種と戦つてから既に一週間……ヤマト達は三日前から任務にでられる用になり、いつもの生活に戻っていた

「お兄ちゃん、お疲れさま！」

「ヤマト、おつかれ！」

オレーシャとナナの二人が走ってきてその後ろから赤い帽子に銀髪、アクアブルーの瞳、学生服風の赤と黒い服に赤いスカートの美少女が周りを警戒しながらついてきた

「……」

「…もう、アリサつたら警戒しすぎだよ！」

「私は当然のことをしているだけです！貴方達は警戒しなさ過ぎです

!!

美少女の名はアリサ。アリサ・イリーニチナ・アミエーラ。ロシア

支部から二日前に赴任してきたばかりの新人でこの二日間で既に極東支部の神器使いからは嫌われていた

「別に警戒してない訳じゃない…ただ、俺達3人は気配に敏感でこのくらいの警戒度でも補足される前に身構えることができる……それだけ」

ヤマトがそう言うがアリサは全く理解できない見たく何も言わず

にその場を去つていった

「……俺たちも戻ろう」

「うん、お兄ちゃん！」

「う、うん…そうだねヤト…」

ヤマトの言葉にナナは元気良く頷くがオレーシャは先を歩くアリサを表情を暗くしながら見つめていた

極東支部 エントランスロビー

「ただいま、帰還しました」

「お疲れさまです、ヤマトさん、オレーシャさん、ナナさん。あちらにエリナさんが来てますよ」

ヤマト達が極東支部に戻るといつも通りにヒバリが出迎え、更にはヤマト達に客…エリナが来ていることを伝えてくれた
「ありがとうございます、ヒバリさん」

「あ！お兄ちゃん！」

「お、おつと」

ヒバリからエリナが来ていると聞きエントランスの階段を上るとエリナがヤマトに向かつて走りながらジャンプして抱きついてきた
「エリナちゃん、階段で飛び込んでくるのは危ないよ」
「エヘヘ、ごめんなさい」

エリナはヤマトに謝りながらも反省しているようには見えていな

かつた

「お前達、戻ったか……その様子だとお前達三人に三日間熟して貰つた任務はリハビリにもならないようだな」

「ツバキさん、お疲れ様です。そうでもないですよ……極東からロシアの間で野良狩りしてたよりは大分鈍つてましたし具現の練度も少なからず二割近く落ちてました……今の僕ではスサノオやウロボロスなどの大型禁忌種は倒せないと 思いますよ」

「それほどまでに落ちているのか…………早めに全力を出せる様にしておけ……何かが起きてからでは遅いからな」

「勿論分かつています。なるべく早くこの鈍りを取り除きます」

「期待している」

ツバキは少し微笑むとヤマトと別れエレベーターに消えていった

「ねえ、ヤマトお兄ちゃん？ 具現つてなに？」

ツバキと話してゐる間ずっと静にヤマトに抱きついていたエリナがツバキとの会話で聞こえた「具現」について聞いてきた

「具現つてのは想いの力を形にしてこの世界に顕現させる……自分のイメージを形にして奇跡を起こすってことだよ」

「うつ、ヤマトお兄ちゃん……なに言つてるか分からぬよ……難しいよ」「エリナちゃんには難しかつたね。でも、エリナちゃんにはいつか必要になるかも知れないから今は頭の隅にでも置いとけばいいよ」

「う、うん」

ヤマトの話を理解できぬでいたエリナ……そんなエリナの頭を撫でるヤマト……エリナの頭を撫でるヤマトの顔はレクイエム使用後からナナやオレーシャ、エリナの前でしか見せない程の微笑みだつた

続く

ヴァージュラ



「ヴァージュラですか……」

極東支部に第二の新型神機使いアリサ・イリーニチナ・アミエーラが来てから少したつた頃、ヤマト達、第六部隊はツバキにエントランスロビーへと集まる指示を受け三人が集まると【鎮魂の廃寺でヴァジユラ討伐】を言い渡された

「そうだ。ここ最近ヴァジユラの出現が増えて、偵察部隊や新人に被害が出ていてな。先程も第一部隊のソーマ、サクヤ、コウタ、ユウの四人が贖罪の街に出現したヴァジユラを討伐に行かせたところだ」

ツバキの話にヤマトは何か不安を覚えた……それは贖罪の街に第一部隊を送った事なのかそれ以外なのかはヤマトはわからなかつたが今日はよからぬ事が起るとヤマトは感じていた

「わかりました……準備ができ次第、出発します」

「ああ、よろしく頼むぞ」

ツバキはそう言いエントランスロビーからエレベーターに乗り居なくなつた

「ナナ、オーチyan……嫌な予感がする……ミッショーン中、何時もよりも警戒を怠らないで」

「うん、わかってる。私もなんかわからないけど【フォトン】がザワついてるから良くないことが起きるかも知れない」

「うん、わかってるよ、お兄ちyan。私も今朝からずつとチクチクしてるんだ」

二人とも今朝から何かしらの異変を感じておりヤマトの言葉に軽く頷いた

鎮魂の廃寺

「……いた」

大量のコンゴウ種と戦つてから数週間しか経っていない鎮魂の廃寺にヤマト達、3人はミツシヨンで再び訪れていた。

鎮魂の廃寺に来て直ぐにヤマト達は今ミツシヨンのターゲットのヴァジュラを見つけていた

「オーラちゃん、ここからナナキで狙撃できるか?」

「うん!任せて!全てを撃ちぬけ!戒劍ナナキ!!かいけん」

オレーシャが名前を呼び新たな具現武装を具現した

紫の長生き銃身に黒と紫の四枚羽の銃がオレーシャの手元に具現した

「まずは、左前足!!」

オレーシャが引き金を引くとオラクルが圧縮された弾丸がヴァジユラに向かつて放たれた

「グギヤツ!?」

ヴァジュラは不意打ちで左前足を撃たれた事でバランスを崩して倒れ込んだ

「今!」

「了解!」

ヤマトの合図でナナの身長の倍はある両刃斧、闇斧えんぶ ラビュリスを持ったナナと封印されるように大きな鞘に収まってる世果よのはてを持ったヤマトの二人がヴァジュラに急接近する

「ぶつ叩け!!」

「碎けちゃえ!」

「……グオオオオ……」

倒れ込んでいるヴァジュラの正面から世果よのはてを振るうヤマトと闇斧えんぶ ラビュリスを振り下ろすナナ…パワーがあり過ぎた為にヴァジュラに当たると同時に地面がエグレ、大きめなクレーターを作り出してヴァジュラはなすすべも無く力尽きた

「ふうう。ヴァジュラは呆氣なかつたな」

「そうだね、お兄ちゃん」

「無事、任務完了だね」

具現武装を解くヤマトとナナに同じく具現武装を解いたオレーシャが合流する

「私も折角ナナキの斬モードがあるから近接戦も出来るようになろうかなあ～」

「いいんじやないか？剣の扱いなら俺も少しなら教えてあげられるよ」

「嘘だ～。ヤトが少しなら誰も教えられないよ～。ヤトって元師範代なんだからさ～」

そう言うオレーシャにヤマトは何も言わずに俯いてしまう

「あつ、ごめん」

「いいさ、気にしないでくれ。もう何年も前のことだから」

そう言つて笑顔を見せるが、ヤマトの笑顔には感情が籠もつていなかつた

「それじやあ、帰ろ！私おなかすいたよ～」

「はは、ナナは食いしん坊だからな。」

「そうだね、それにここは寒いから早く帰りたいかな」

話を変えようとナナはいつもの笑顔で2人に言うと、ヤマトは少し微笑み、ナナの頭をなでる

「そうだ、コアを探つてと」

ヤマトの右手の機械が音を立て起動すると神機の捕食形態ブレデターフォームと酷似した口が機械から飛び出しヴァジユラを捕食した

「いつ見てもすごいよねえ～、お兄ちゃんの発明品」

「ありがとう、ナナ。技術者として嬉しいよ。」

捕食特化型神機“アバドン”、出現頻度が激レアで倒すとレアな素材を落とすと言われているアラガミ“アバドン”から由来されたそれは、高い偏食因子を持つ者しか扱えないため、現状、現役の神機使い、引退した神機使い、そしてヤマトくらいで、現在使っているのはヤマトだけであった

「(一)ちらヤマト、ヴァジユラを討伐。帰投する」

『ヤマトさん!? ちょうど良いところに…あ、いえ…済みません』

帰投するためにヒバリさんに連絡を入れると慌てているのか何か

を隠しているのか驚かれた

「ヒバリさん。何があつた？緊急事態だろ？」

『その…実は……え？はい。わかりました、ツバキさんに変わります』
『私だ…先程、第一部隊のソーマから連絡があり、贖罪の街にて別任務
中のはずのリンドウとアリサと遭遇、その後二手に分かれて探索中に
ヴァジユラの新種と遭遇、教会内でリンドウとアリサが戦闘。戦闘中
にアリサがバレットを誤つて天井に撃ち込んでしまい、リンドウが孤
立、救助を試みるもヴァジユラの新種と戦闘になり、リンドウの指示
でセーフティーエリアまで撤退したことだ』

「そうですか……ツバキさん、俺たちにやつて欲しいことがあります
んか？」

『ツ……リンドウを…弟を頼む』

いつもは冷静で物事を考えているツバキさん、そんな彼女が普段見
せることのない、言葉を口にした

「勿論です、第六部隊は第一部隊隊長の兩宮リンドウの救助活動を始
めます。」

『待つて下さい！ヤマトさん達の位置からでは！』

「安心してくれ、ヒバリさん。方法ならある。」

ヤマトはそう言うと通信を切り、ナナとオレーシャに振り返る

「2人とも話は聞いたと思うが……」

「うん！リンドウおじさんを助けに行こう！」

「既に座標はセットしてあるよ。戦闘も考えて、空中に設定してある
から跳んでからは気を付けて」

「2人ともありがとう。それじゃあ……」

3人はそれぞれの具現武装を掲げる

「六芒均衡、1呪神ヤマト」

「六芒均衡、3呪神ナナ！」

「六芒均衡、5オレー……ううん、4代目クラリスクレイス・アナス

ターシャ・レオンノヴァ！」

「「六芒」の輝きにかけて！アラガミを殲滅する！」

3人の足下に六芒星が輝くと3人の姿が消えてしまった

続
く

蒼穹の月

◇贖罪の街 上空

「あれは、プリティヴィ・マータだな？」

「うん、マータだね」

鎮魂の廃寺から消えた3人は贖罪の街上空にいたツバキから聞いていた“新種のヴァジユラ”とは、ユーラシア大陸で確認されていたとされる、ヴァジユラ神属の接触禁忌種のプリティヴィ・マータ。ヤマトは独自の情報網でフェンリル本部からの情報を入手し、ロシア支部と極東支部の往復で何度も討伐していた

「おーちゃん！」

「任せて！クラリッサ!!」

ヤマトの声にオレーシャ……アナスター・シヤは頷くと3本の杖がアナスター・シヤの回りを浮遊するように現れた

「ロックオン！手加減なんてしないよ！クラリッサ、イル・フォイエ！」

イル・フォイエ、アナスター・シヤが使う火属性最大技。クラリッサにより隕石を炎で作り出し、ターゲットに向けて落下するこの技はたとえ接触禁忌種であろうと火属性が効かない限り一発で絶命させてしまう

「ナナ！」

「OK！お兄ちゃん！」

勢い良く着地した3人は平然とプリティヴィ・マータの死体の間を走り抜け、アリサが誤射した瓦礫で塞がれた入り口にたどり着くと、ヤマトはナナに声を掛ける

ナナは兄でもあるヤマトの考えを即座に理解し、ラビュリスに力を込める

「うおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
叫ぶナナに呼応してラビュリスが光り出し、ナナはそのまま振り下

!!!!!!!

ろした

振り下ろされたラビュリスは瓦礫を破壊して入り口が開かれる

「うおお!? ヤマト達か!?

「ツバキさんからの指示で救出しに来ましたよ、リンドウさん」

教会の中では複数のプリティヴィ・マータを相手取るリンドウが瓦礫が吹き飛んだことに驚いて声を上げていた

「おーちゃん、ナナはマータを頼む。俺はあるの親玉を狩る」

「うん、了解」

「はーい！」

教会内にはプリティヴィ・マータだけでは無く、教会の高い位置の外に通じる穴にボスの風格を持つ“黒いヴァジユラ神属”が高みの見物をしていた

「情報でも見たこと無いアラガミだな…………いや、どこかで聞いたことがあるか？ 誰の話だったか？ 話、トラウマ……ヴァジユラのトラウマ……そうか、思い出した」

ヤマトは目の前の“黒いヴァジユラ”をどこかで聞いたことがあると記憶を思い出していく、そして、思い出すと怒りをあらわにした
「お前あーちゃんの両親を喰つたアラガミだな?!」

「ツ!!」

怒りをあらわにしたヤマトが叫んだことにプリティヴィ・マータを殲滅していく、アナスター・シヤが驚きの表情をする

「漸く見つけたぞ！」

ヤマトは世界を構えて走り出した

「GYAAAAAAA!!!」

黒いヴァジユラは吼え、ヤマトに向きつて雷球を複数放つ

「ヤマト！」

「おらあ!!」

後ろのリンドウがヤマトに叫ぶが、世界・封にサーフボードのよう乗り、そのまま雷球を封殺して黒いヴァジユラに突貫した

ライドスラッシュヤー……ヤマトが突貫するときによく使う技で武器をサーフボードの変わりにして突撃する技だが、もちろんのこと、

武器をサーフボードにするため自分より高い位置の相手には無防備を晒すことになる

「随分硬いな、その鱗」

「世界・封を黒いヴァジユラに叩きつけるが、あまりダメージを受けていなかつた

「ああ、わかってるよ。お前も骨のある奴を相手にしたかつたよな、世界。お前の封印解いてやる！存分に力を振るえ！」

武器と喋るヤマトにリンドウは困惑していたが、ヤマトが鞘を外すと光り輝く刀身があらわになる

「いくぞ！」

ヤマトはそのまま黒いヴァジユラに向けて走り出した

「おい、ヤマト！」

「大丈夫だよ、リンドウさん」

ヤマトを制止しようとするリンドウはアナスター・シャに止められた

「ヤトが世界の封印を解いた時、それはヤトの本気なの」

「ヤマトの本気？」

「はい、ヤトのお父さんはある剣の流派を継いだ人でした。ヤトも幼い頃からその流派を教わり、師範代にまで上り詰めてました」

「GYAAAAAAA!!!」

話の途中、黒いヴァジユラの咆哮が聞こえ！アナスター・シャがふり

向くとヤマトが高くジャンプしていた
「飛天御剣流……龍槌閃！！！」

高くジャンプしたヤマトはそのまま重力に逆らわず落下する

落下地点では黒いヴァジユラが口を開け今にも飛びかかろうとしていたが、ヤマトは構わず落下したまま剣を振り下ろした

振り下ろされた剣は落下速度も合わさり重い斬撃になっていた
「飛天御剣流、何人も教わりましたが技まで継承しているのはヤト一人だけです」

ヤマトが着地と同時に黒いヴァジユラも崩れ落ちたが、誰一人警戒を緩めていなかつた

「仕留め切れなかつたか」

ゆっくりと起き上がる黒いヴァジュラ……ヤマトの一撃で左目と
幾つかの歯が結合崩壊して地面に落ちているだけだった

「逃げた？」

黒いヴァジュラは立ち上ると高みの見物をしていた穴から外に
でていった

「ヤト、追いかける？」

「いや、深追いは辞めよう。一先ず、リンドウさんの救出には成功した
からな。帰投しよう。ヒバリさん、ヘリの手配をお願いします」

『は、はい！至急手配します！』

通信機越しに慌てるヒバリの声にヤマトは微笑んでいた

続く

六芒星

「お前達、よく戻った」

ヤマト達、四人がアナグラに戻るとアリサを除く第一部隊のメンバーと第二、第三部隊、そして教官のツバキが待っていた

「救助任務は成功しました、ツバキさん」

「ああ、よくやつてくれた。リンドウとヤマトは後ほど報告書を提出するように」

「わかりました、それからあー、アリサはどうしますか？」

「アリサは主治医の元、現在医務室で治療中だ。面会も禁止されている」「ですか、おーちゃんついてきてくれ。リンドウさんも」

「ん、了解！」

「俺もか？」

ヤマトはアナスター・シャーリンドウに声をかけ歩き出そうとする
と、ツバキに止められた

「待て、アリサへの面会は禁止されている」

「これは俺とおーちゃん、あーちゃんの問題です。面会禁止だろうと
関係ないです。それに……」

ヤマトの次の言葉には憎悪が滲み出ていた

「ヤブ医者があーちゃんを診ているのを黙つて見るのも限界なんだ」

ツバキはヤマトの初めてみるその顔に一步引いてしまう

「……なら、私も行こう。私なら少なからず融通が利くからな」

「……わかりました、お好きにどうぞ」

ヤマトはツバキにそれだけ言うと歩き出した

「イヤアアアアアアアアア」

「失礼するぞ、オオグルマ先生」

「おや、雨宮教官？ アリサの面会は禁止したはずです……」

「どうしたオオグルマ先生？ リンドウの顔を見て驚かれてる様子だが
!!」

？」

医務室にツバキを先頭に入つていくとアリサの悲鳴が響き渡る中、ツバキがオオグルマに声をかけた

オオグルマはリンドウの顔を見るや驚愕していた

「い、いや！何でもない。用が無いなら出てつてくれ！」

「出て行くのはお前だろ、ヤブ医者？」

話を切ろうとするとオオグルマに普段よりも低い声でヤマトが言い、前に出る

「なんなんだ、君は？いきなり私をヤブ医者呼ばわりして？」

「ヤトガミ・レイナ・マリー・エクセリア。お前にはそう言えばわかるだろ？」
「!!!!」

『ヤトガミ・レイナ・マリー・エクセリア』、オオグルマがそれを聞いた途端に先程よりも驚愕し、悪魔を見ているようだつた
「さつさと、出て行きお前のご主人様にでも報告するんだな。さもなければ、医務室を赤く染めるぞ？」

普段見せないヤマトの顔に後ろのツバキたちも一瞬震えるが、ヤマトの殺意を向けられているオオグルマは顔色を青くして医務室を飛び出していつたのだつた

「ヤブ医者が居なくなつたから、後は錯乱しているアリサですね」「ああ……だが、どうするつもりだ？鎮静剤などは彼奴しか打つことが出来ないぞ？」

普段通りの無表情で話すヤマトに少し反応が遅れるツバキ

そんなツバキを気にせず、未だに錯乱しているアリサの元に歩くヤマト

「いい加減にしろ、馬鹿アリサ!!」

珍しく叫び、アリサの頭を殴りつけるヤマトについてリンドウとツバキが驚き、口を開けていた

「……い、痛いじゃないですか？いきなり殴るなんて酷いですよ!?」

先程まで錯乱していたアリサが殴られた痛みで我に返り、ヤマトに苦情を言つてきた

「そんなことより、周りを見ろ」

「そんなことってなんですか!? そんなこと……リンドウさん」

「よお、アリサ。元気そうでなによりだ」

ヤマトに怒るアリサはリンドウの顔を見て顔が強張ったが、リンドウは普段通りに話していた

「アリサ、今回のこととは気にするな。誤射なんてよくあることだ」

「ですが私は……リンドウさんをアラガミと一緒に……」

「閉じ込められたがヤマトに助けられた、それでいいじゃないか。それに、俺は隊長だからな、部下は全員生きて帰させる。隊長の使命だ」「それで、お前が死んでは意味がなかろう」

アリサにそう言うリンドウ、普段は不真面目であるが第一部隊を任されている者としての覚悟はリンドウは持っていたのだつた

「まあ、そんなわけだ。俺がこうしているのもヤマト達のおかげだ」

「気にしないで下さい、リンドウさん。リンドウさんは俺の家族みたいなもんですから」

「そうか……、アリサ。邪魔したな、取り敢えずゆっくり休め」

「……はい」

リンドウとツバキはそれだけ言うと医務室を後にし、医務室にはヤマトとアナスター・シヤ、病院服のアリサの3人となつた

「ねえ、アリサ? 私とヤトにどこか……多分ロシアで会つたことない?」

「……何言つてるんですか? あるわけないじゃないですか」

「……そう、だよね。ごめんね! 変なこと聞いて」

「いえ……でも、ロシアにいたとき、新型GOD EATERに選ばれる少し前……両親が殺されてから入院していた病院でよく取り乱して、私と同年代くらいの少年に殴られたことがありました」

普通なら問題であるその行動だつたが、結果的にアリサは落ち着きを取り戻して一般レベルの生活に戻れるまでに回復したのだった

「そうか……すまなかつたな。心身ともに疲れているのに邪魔したな。明日また来る」

「アリサ、ゆっくり休んでね!」

「あ……はい、ご迷惑をおかけしました」

ヤマトとアナスター・シャはアリサを気遣い医務室を後にした

続く

具現武装

「やあ、アリサ。しつかり休めているか？」

「あつ、ヤマトさん」

翌日、その日の任務を終えたヤマト、アナスター・シヤ、ナナの3人は医務室のアリサの元を訪れていた

「どうも」

「ああ」

ヤマト達の前に先約としてユウがアリサを見舞いに来ていた

「あの、ヤマトさん……」

「僕達に答えられるの物なら答えてやる」

近くの椅子に腰を掛けるヤマトにアリサは何かを聞きたそうにしていた

「ヤマトさん達の神機は何なのでしょうか？」

「僕達3人のは神機じゃない。あれを俺達は“具現武装”と呼んでいる」

「具現武装……ですか？」

聞き慣れない言葉にアリサとユウは困惑していた

「ああ、この具現武装は未だに発現者が少なく俺の研究の一つでもあるんだが、幾つか分かつてていることがある。具現武装の特徴の一つとしてオラクル細胞を持たない」

「そんな!? それじゃあ、どうやつてアラガミを倒してるんですか!? アラガミはオラクル細胞でないと倒せないと倒せないはずです！」

ヤマトの言葉にアリサもユウも驚きを隠せなかつた

「原理は僕も理解し切れていない。周囲のオラクル細胞をアラガミを攻撃する瞬間にだけ纏うのか、体内の偏食因子が「フォトン」に反応して活性化してアラガミを倒せるのか、研究には困らない物なのは確かだな」

「あの、フォトンとは?」

初めて聞く言葉、「フォトン」にアリサは聞き返してきた

「大気中に存在する万物を司るエネルギー『が「フォトン」。僕達3人はこのフォトンを使用して武器を具現させて、アラガミと戦つている。フォトンの使い方はまだまだ試験段階ではあるんだが、属性攻撃は勿論、バレットのような銃撃やメテオから近接では斬撃を飛ばしたりチャージクラッシュのように剣に纏わせて威力を高めたりすることもできる。後は、身体強化やテレポートも可能だな。テレポートは現状アナスター・シヤだけだけが」

「それは適材適所だよ。私は遠距離からの補助がメインだからね」

アリサとユウは、ヤマトとアナスター・シヤの話についていけないでいた

「フォトン」と言う未知な力にオラクル細胞のアラガミを同じオラクル細胞以外で倒す力にありえないテレポートまでできるのだから「フォントは誰にでも扱える物なのでしょうか?」

「理論上は。だが、何かしらのきっかけが必要みたいだ。そのきっかけも個人差があつて特定できていない。僕の場合は世界への復讐心」「確かに私は弱い自分への後悔と強くなりたい願い」

「私もお姉ちゃんと同じで弱い自分への後悔。それから自分への恐怖

「恐怖…ですか?」

ナナがフォトンを扱えるようになつた理由にアリサが聞き返してきただ

「うん。私に眠る力…【誘引】 つ呼んでるけど、この力は昔コントロールできなくて、悲しいこととかあつたときにこの力を暴走させてお兄ちゃんと出かけていたときとかこの支部にいた時とかにアラガミを引き寄せて沢山の人に迷惑をかけたことがあつて……お兄ちゃんもリンドウおじさんも気にするなつて言つてくれたけど……力の制御ができない自分が怖かった」

「僕達3人に共通するのはそれぞれ異なるトラウマを持つていることだ。でも、それがフォトンを扱えるようになるきっかけになるかは不明だな。それにフォトンが扱えても具現武装を具現できるかはまた

別の問題にもなる」

ヤマトはそう言っているが実際の所は「フォトン」を扱えるのがヤマト達3人だけで、その3人が全員、具現武装を発現していく分からないのだつた

「一つ分かつてているのは具現武装を具現するには自分の意志を待つことだ」

「意志…」

「ああ、意志が強ければ強いほど具現武装も強くなり力を持つ。その力をどう使うかも意志になる」

意志の力、後に「血の力」とも呼ばれる」ともあるが、ことあるごとにヤマトは否定するのはまた別のお話である

「アリサもユウも自分の意志を持つていれば何れ、フォトンを扱えるようになるさ。感だけどな」

ヤマトはそう言うとナナとアナスター・シャを連れて医務室を後にした
続く

復帰

「なあ、アリサって確かに今日、復帰するんだよな？」

「そうだな」

あの日から2週間したころ、第一部隊のユウとコウタはロビーで待機していた

今日は一通りの検査を終えたアリサが復帰することになっていた

「……アリサ、大丈夫かな」

「どうだろうな……」

問題は幾つもあり、その一つが第一部隊隊長で極東支部の顔とも言われているリンクドウをアラガミと一緒に閉じ込めてしまつたこと

二つ目はロシアから転属してきてからあの事件までアリサが周りを見下していた態度を取つていたことだつた

「……つと、来たか」

噂をすれば、とはよくいったものだつた、エレベーターからロビーにアリサが降りてきた

「……本日より、原隊復帰となりました。また宜しくお願ひ致します」アリサが目線を下げながら言う。最初とは大違いにコウタとユウは少しだけ驚いていた

「……実戦にはいつ復帰するの？」

「それは……まだ分かりません……」

「そうなんだ……」

以前とまるで違うアリサに少し戸惑う、ユウとコウタ

「……焦らずに頑張ればいい、アリサ」

「……はい」

ユウはアリサに優しく声を掛けた

「おいおい、聞いたか？ 例の新型の片割れ、やつと復帰するみたいだぜ？」

「…………！」

突然下から声が聞こえ、アリサがビクリと反応する

「ああ。リンドウさんを、新種のヴァジユラと一緒に閉じ込めた奴だろ」

「ところが、あんなに威張り散らしてたくせに結局戦えなくなつたんだつてさ」

「ハハハ！結局口ばっかりじやねえか！」

何も言えないままアリサが俯いてしまう

「貴方たちも笑えばいいじやないですか」

「俺達は笑わないよ……いや、笑えないよ」

「そうだよ、アリサ。それに……そろそろ来ると思うよ」

「来るつて……」

ユウとコウタはなぜか冷や汗をかきつつアリサにそう言つていると、ロビー内が急に寒くなる

「人のことを笑つてる暇があるなら訓練か任務でもやろうとは思わないのか？」

外部と繋がるエレベーターから少年少女3人が降りてきて、少女二人……ナナとアナスター・シャの前に立つヤマトが低い声でそう言うと、アリサのことを噂してきた二人は、ヤマトを軽く睨む

「ヤマトさん、任務お疲れさまでした。凄いですよ！接触禁忌種計20体を3人で討伐してしまうなんて！！」

「はあ！？！」

オペレーターであり、任務などの受付嬢でもあるヒバリがヤマトに声を掛け、任務を終えてきた3人を絶賛すると、アリサのことを笑つていた二人組は目を丸くして口を半開きにしていた

「最近はあまり禁種を狩つてなかつたからいい運動になつた。暫くはここら一帯のアラガミの活動は抑えられる。だが、黒いヴァジユラは見つかなかつたから、ヴァジユラ神属の活動には注意するように調査班に言つてくれ」

「はい、承りました。お疲れさまでした」

ヒバリにそう報告するとヤマトはナナとアナスター・シャを連れて

アリサ達に向かつて歩き出した

「復帰おめでとう、アリサ」

「お姉ちゃんおめでと！」

「おめでとう、アリサ!!」

「はい……ありがとうございます」

ヤマト達3人はアリサに声を掛けるとアリサは余り元気がなかつた

「そ、そうだ！ヤマトさん達が禁種を討伐していたって！」

「ん？ああ、ハガンコンゴウにスサノオ、テスカト・ポリカ、セクメト、アイテール、ラーヴアナ、ウロヴオロスを片つ端から狩ってきた。禁種を狩つていけば黒いヴァジユラに会えると思つたんだがな。尻尾はつかめなかつた」

「そ、そ、う！黒いヴァジユラ、歐州でも目撃されたつて！ここに来て新種の目撃例が増えてて何かの予兆なんじやないかつて……」

コウタが黒いヴァジユラに関して話し出すと、アリサの顔色がどんどん悪くなつていつた

「……スマン、後は頼んだ」

コウタはユウにそれだけ言うと逃げるよう口ビーから出て行つてしまつた

「あの……私に戦い方を教えてほしいんです！もう、あんなことが無いように強くなりたいんですね!!」

ユウとヤマト達にそう言つてきたアリサの瞳に強い意志を感じられた

その意志を感じ取つたヤマトは口元を緩ませ右手を前に差し出す
「俺が教えられることなら教えてやる。ユウ、お前はどうする？」

「僕もお願ひします」

ついて行くことを決めたユウの瞳にも強い意志をヤマトは感じ取つた

「わかつた、だが、俺達も禁種討伐明けで疲れてるから明日から構わないな？ツバキさんにも許可は取つておかないと行けないと行けないからな」「分かりました」

「了解しました」

ヤマトがそう言うとアリサもユウもうなずき、その場で解散することになった

（翌日）

「おはようリツカ、あれはできるか？」

「おはよう、ヤマト！もちろん準備はできてるよ」

翌朝、ヤマトはタンクトップにオーバーオールをはいた、リツカと呼ぶ女性に会いに来ていた

楠リツカ、神機の整備士兼神機の開発などを技術主任のペイラードから任されていて、技出者としてアナグラにいた頃のヤマトを知る人物でもあった

リツカがハッチを開けるとそこには一台のトレーラー置かれていた

「注文されていたヤマトが使っていた車を応用して造った対アラガミ装甲車だよ。サバイバルミッションや遠征でも使えるように荷台は寝床として利用できるようにして、シャワーを常備、神機のメンテナンスやコアの保管もできるようになっている。最大6人までなら余裕を持って生活できるようにしてある。ガソリンはクアドリガをベースに実験的な自己精製システムを組んであるけど、あんまり作れないから気を付けて、電気はバッテリーとヤマト考案の太陽光での発電、風の力を用いた風力発電を実験として積んであるよ」

「ガーデンクローシュは？」

「本体はある程度作れるけど、土がまだまだ研究段階だから三つはしか積んでないよ」

「ガーデンクローシュは俺がほぼ完成させていたが、太陽光発電と風力発電はよく形になつたな？」

ガーデンクローシュ、ヤマト考案の野菜の栽培専用機械だ

元はヤマトが極東支部の研究員の頃に主に扱っていた研究テーマが「食」に関してであり、その中でも力を入れていたのが「昔の野菜を再現し安定供給できるように」だつたのだ

ガーデンクローシュもその中で作り出された機械で種と土、水を用意してあれば半自動で野菜を作り続けてくれる

だが、ガーデンクローシュにも欠点があり、まず種が問題になる昔の野菜などの種などあるわけも無く、ヤマトが駆けずり回り、ノルンのデータを血眼になつて閲覧して野菜の再現が出来上がつた

次の問題は野菜で、種は再現できたが思い通りにいかず、美味しい野菜になるのに数千回の試行錯誤が行われた

土……土壤が最大の問題であり、ガーデンクローシュが利用されていない理由でもあった

土はアラガミによつて踏み潰され、環境の変化により土に眠る栄養は無くなり、污水により汚染されるなど野菜などを育てるには全くもつて適さなかつた

そのためヤマトは研究に研究を重ねて土壤を作り上げた……だが、この土壤も数回の収穫で栄養を全て使い切つてしまい、野菜の安定供給はめどが立つていなかつた

「太陽光発電と風力発電は昔からあつたみたいだからね、それを再現しただけだよ。このトレーラーは研究段階の物を詰め込んで実験するおもちゃ箱だね」

「まあ、基本俺が考案しているからな、俺が被験体になるさ……どうかしたか？」

ヤマトがそう話すとき、リツカは不思議そうにヤマトをみていた
「ヤマト、変わった気がするよ。昔はもう少しかわいげあつたのにね」「いろいろ背負う物を背負つたからかな」

「そつ、でも無茶はしないでね。ヤマトは親友で師匠でもあるんだから」

「安心しろ、俺はそう簡単に死なないさ」

ヤマトはリツカにそう言うとトレーラーを動かして行つてしまつ

た
続
く

アリサとユウの特訓 I

「サバイバルミッション……」

「聞いたことありませんよ?」

対アラガミ装甲車で移動中、今回の任務についてヤマトがユウとアリサに説明を行っていた

「サバイバルミッションとはアラガミを同部隊がアナグラに帰還せずに討伐する連続任務の事を言う。一人が知らないのは無理も無い、極東でもこの任務を受注できるのは本当に一握りだ。ツバキさんがこの任務の受注を禁止しているのもあるがな」

「どうして教官が?」

「このサバイバルミッションは通常任務よりもかなり危険度が高くなる。その理由は任務遂行までアナグラへの帰還ができないからだ」

アナグラに帰還せずに連続で任務をこなす、ユウとアリサはアナグラに帰還できないだけで危険度が高くなり、教官のツバキが禁止にする意味がわからぬでいた

「アナグラに帰還できないってことは消費アイテムの補充、神機のメンテナンスができない。その上、コアなどの素材も持ち歩かないと行けない分、アラガミに狙われやすくなる」

「でも、お兄ちゃんがいるから神機のメンテナンスは問題ないんだよ!!」

この場で最年少のナナが元気良く、そう言うとヤマトがナナの頭を軽く撫でる

「俺はこう見えても技術者でな。少し前までは極東支部の技術部の部長でもあつたんだ。メンテナンスから始め、強化なども出来る。その上、この対アラガミ装甲車で休息も取れるから今回のサバイバルミッションの許可が下りたんだ」

「まあ、今回のサバイバルミッションは形だけで三つのミッションを連續で熟すだけだけどね~」

対アラガミ装甲車を運転しているアナスター・シャガヤマトの捕捉としてそんなことを言う

そう、今回の任務はヤマトが近場のミツショーンを三つ選んできた物であり本来のサバイバルミツショーンではなかつた

「それと、今回のミツショーン中の戦闘には俺とナナ、アナスター・シャガヤマトの作戦エリアへの侵入、お前達がピンチに陥つたときは勿論助けるから気軽に戦つてくれ：いいな？」

「はい!!」

ヤマトの言葉に力強く返事をするユウとアリサ、だが、ユウは兎も角アリサは復帰して直ぐ、今回のミツショーンであまり成長は出来ないだろうとヤマトは考えていた

「まず最初はアリサの感覚を取り戻すために軽めにオウガテイル20体の討伐だ」

「いやいやいや、多過ぎ（ですよ）!?」

アラガミの中で最も討伐回数が多い小型アラガミ『オウガテイル

討伐回数が多いが、オウガテイルを複数体相手はベテランゴッドイーターでも喰われてしまう可能性がある、そんな相手をヤマトは20体の討伐をまだまだ新人の二人にやらせようとしていた

「お前達二人が実力を發揮出来ればこの位は簡単だと思うぞ？俺達3人も後ろにいるから心おきなく戦つてくれ」

「（鬼だ）」

「（お、鬼がいます）」

ユウとアリサは内心、ヤマトのことを鬼だと思つたが直ぐに切り替え嘆きの平原に降り立ち、オウガテイルを捉える

「アリサは後方から支援して！僕が前衛を務めるから！」

「り、了解です！」

ユウとアリサはオウガテイルとの戦闘に入るが、復帰してから初め

ての実戦のためかアリサの動きがぎこちなく、ユウが何度もフオローに入りなんとかオウガテイルを20体の討伐を二人で熟すことが出来た

「あの、す、すみませんでした」

戦闘終了後、対アラガミ装甲車で一人が休憩しているとアリサがユウに謝った

「気にならないでアリサ。本調子じゃないからフォローに入るのは当然だよ」

「謝るのも大事だが、先の戦闘で思うことがあるなら同じことを繰り返さないようにしろ」

「はい……」

「それからユウ。お前は各形態への切り替えが遅すぎる。小型や中型なら問題ないだろうが、第一部隊は遊撃部隊だ、もう少ししたら接触禁種などを狩るようになる。今ままなら間違いなく死ぬぞ、各形態への切り替えをもつと速くできるようにしろ」

「…了解です」

先のミッションで上手く立ち回れなかつたため元気があまりないアリサ、先の戦闘でのダメ出しを受けたユウ

先の戦闘で何もしなかつた人が何を言つているのかと普通なら言つてしまふかもしけなかつたが二人はヤマトの強さを知つて戦い方を教わろうとしているのもあり何も言わなかつた

「まあ、でも…オウガテイルに20匹狩りを新人脱け始めた二人がよく頑張りました」

ヤマトは先程の厳しい口調ではなく優しく一人に言いつつ頭を撫でる

「もう！子供扱いしないで下さい！」

「あ…すまない。つい癖でな」

頭を撫でられ子供扱いされて怒るアリサに謝るヤマト。

ユウの目には二人が兄妹のように見えた

「と、取り敢えず今日の任務はこれで終わりだ。神機のメンテは俺がやっておくから女性陣は先にシャワーでも浴びな」

「シャワーもあるのですか!?」

「ああ、後部の左側のドアの先に浴槽は作れなかつたが少し広めにシャワールームと脱衣所を用意してある。アナスター・シャとナナに頼まれてな。女性はその辺を気にするだろ?」

「ほらほら、アリサ行こ!」

「ち、ちょっと引っ張らないで下さい!」

アナスター・シャに引っ張られ連れて行かれるアリサにユウは微笑んだ

続く

アリサとユウの特訓 II

「なんだ、眠れないのか？」

「女の子達の話し声が聞こえてきて中々…」

対アラガミ装甲車の屋上で夜の見張りをヤマトがしているとユウが登ってきた

「アナスター・シャとナナには後で言つておかないとな……それで、神機無しに外に出て何か聞きたいことか?」

ヤマトの言葉にユウは驚いた表情をしていた

ヤマトの言うとおりユウは自分の神機を持つてこずに外を出歩いていた

それはこの世界でアラガミに食べて下さいと言つてている物であり神機使いではありえないことだった

「アリサとは知り合いですよね」

「どうしてそう思つた?」

「アリサと話しているとき懐かしんでいるような表情をしてるのが一つ、初めて会つたにはアリサのことを特別気にしているのが二つ、アナスター・シャさん……オレーシャさんがたまに“昔のアリサは”つて小声で言つてているのを聞いたのが三つ目です」

ヤマトはユウの観察眼を内心褒めていた

今、ユウガ言つた三つの内一つ目と二つ目はアリサに似た知り合いがいたからと思うこともある

三つ目も聞き間違いや顔だけを知つてゐる可能性だつてあつたのだが、ユウの眼差しは真剣そのもの、知り合いだと確信を持っていた「バレる人にはバレるか……ユウ、お前の質問の答えはYESだ。アリサがGOD EATERになつた理由は知つてゐるな?」

「アリサから直接聞きましたから」

「アリサの両親がアラガミに殺されてからアリサは小さな病院にいたんだ。俺はそこの院長家族……と言つても姉妹なんだが、姉妹とは知

り合いでな。ちょくちょく手伝いとして患者のケアを行っていたんだ……アリサはその時の患者の一人だ

「ですが、アリサは病院のことや主治医だったのは男の子って覚えていてヤマトさんのことは……」

「まあな……、これ以上は話すつもりはない……いや、これ以上お前を巻き込むつもりはない」

ヤマトは巻き込むつもりはないと言つたそれはヤマトとアリサの間には何かしらの闇が潜んでいること、これ以上関わればその闇に狙われかねないと意味していた

「分かつたのなら速く寝ろ。明日は今日よりもハードな任務が待っているぞ」

「……分かりました」

ヤマトの言葉に頷くとユウは屋根から降りていった

「そうだ、これ以上は誰も巻き込まない……巻き込んじゃダメなんだ。」

ヤマトの言葉は誰にも聞こえるわけも無く星々が輝く夜空に吸い込まれるように消えていった

翌朝、ヤマト達5人は嘆きの平原の近くに車を止め、セーフティーエリアで最終確認を行つていた

「今回のターゲットはコンゴウ二体のはずだつたのだが……」

平原ではターゲットの赤と茶色いサルことコンゴウが二体と赤と金色のコンゴウ……コンゴウ神属接触禁忌種のハガンコンゴウが

ターゲットのコンゴウ二体を引き連れていた

「ハガンコンゴウは2人には荷が重い……俺が狩るから2人はハガンコンゴウを狩るまで待機」

「ヤマトさんの実力は知つてますが危険すぎます!!アナスター・シャさん達も……」

「必要ない、今回はこれを使うから」

ヤマトはそう言うと腰に備えられたりボルバーを取り出した

「それは?」

「俺が研究開発していた神^{ゴッドスレイヤー・ガン}殺^{スレイヤー}銃^{ガン}」

そのプロトタイプの リボルバー銃 S & W M 19 コンバッ

ト・マグナムだ

神^{ゴッドスレイヤー・ガン}殺^{スレイヤー}銃^{ガン}、ヤマトが極東支部で技術者として生活していた頃、一般人の対アラガミ用の護身用として研究開発されていた一つ、開発中に一定以上の偏食因子を持っていなければ対アラガミ用として使用できなきことが発見されてヤマトの持つプロトタイプ以降の開発は凍結されてしまった

「コンゴウ原種は適度にあしらつておくからいつでも動けるようにしておけ」

ヤマトはそれだけ言うとセーフティーエリアから飛び降りてしまつた

「2人ともよく見ておいて、お兄ちゃんは技術者だけど具現武装を使えなくとも1人でアラガミを討伐して素材集めができるほど強いから」

ナナの言葉に信じられない顔に出でていた2人はハガンコンゴウとコンゴウに向かつて走り出すヤマトを見てナナの言葉が真実だと思わされた

「遅い!」

ヤマトはハガンコンゴウ達が気がつく前にハガンコンゴウの懷に入り込み、額にリボルバーの引き金を引いていた

余りにも速い動きにユウとアリサには追い切れていなかつた

「フォトンでの身体強化。私達がアラガミと戦うときには必ず使用し

てるけど身体強化に関しては私もナナちゃんもヤトには追いつけないの」

「お兄ちゃんの身体強化は凄い滑らかで使いたい筋力……今みたいに脚力に極振りさせたりするんだ！」

「フォトン」、ユウとアリサは事前に聞かされてはいたが改めて驚かれていた

自分たちGOD EATERが神機使いとして定期的に投与されている偏食因子、"P53偏食因子"。これを定期的に投与しなければ自分の神機に捕喰され"アラガミ化"と言う爆弾を抱えなければいけないのでに対し、"フォトン"は捕喰されるという危険性が無い上、自分たち以上の力を持っているのだから

「そのホーミング性能は見切ってんだよ」

コンゴウ神属の回転アタック：何人の神機使いを葬ってきたこれはホーミング性能が非常に高く距離を取つて安心したところを狙われる

その回転アタックを二体のコンゴウとハガンコンゴウが同時に回転アタックでヤマトを狙うがヤマトは幾度もコンゴウ神属を狩つてきたのもあり空中に飛び上がり回避、ハガンコンゴウに向かつてリボルバーの引き金を四回引いた

「特注品だ、受け取れ」

口でピンを抜き手元のものをハガンコンゴウ目掛けてスタングレンードのような物を投げつけるとハガンコンゴウに当たった瞬間、爆発がハガンコンゴウを襲う

「接触禁忌種にもそこそこのダメージを確認。爆発範囲は狭いから速い奴らにはあまり効果は望めないな」

ハガンコンゴウ達と対峙しているヤマトは今投げた物の評価を行っていたが、ハガンコンゴウの怒りの咆哮で考えるのを辞めた
「さて、後どれくらい耐えてくれるかな？」

ヤマトはそう言うと再びハガンコンゴウ目掛けて走り出した

「もう、お兄ちゃん！実験は良いけど程々にしてよ！」

「はは、すまん。久々にこれを使ったから疼いてついね」

ヤマトがコンゴウ達と戦いだして30分近く経過した頃、ヤマトはセーフティーエリアでナナに怒られていた

「ハガンコンゴウだけ倒せば良いのにコンゴウ一体を倒しちゃうし、クレーター作りすぎだよ!？」

ナナの言うとおり平原には無数のクレーターができており、ヤマトの実験対象にされたハガンコンゴウとコンゴウ二体の死体がクレーターの中に捨て置かれていた

元々はハガンコンゴウのみをヤマトが討伐する予定だったが、実験に夢中になつたヤマトによつてコンゴウ一体は討伐され、残りの一体も実験に巻き込まれて溺死の状態でユウとアリサに引き継がれもの数分で討伐されてしまった

「お兄ちゃんは罰として今日も夜の見張りをすること！良いよね？」

「ああ、悪かつたな。2人とも」

「気にならないで」

「いえ、見てるだけでも何か掴めた気がしますので」

ユウとアリサに謝るヤマトだったが「一人は気にしてはいなく、アリサに関してはヤマトの戦闘を見て何かを掴んでいた

「それなら良かつた。このまま次のミッション行くか？それとも、休むか？」

「次のミッションで」

ヤマトがほぼ一人で討伐してしまい体力が残つてゐる二人はヤマトにそう回答した

続く

この間入つたばかりの新人二人は数日でベテランになつてました

ヤマト達がアリサ、ユウの特訓を行つて暫くした頃、第一部隊とヤマト達3人はエントランスに集まつていた

集まつているがヤマト達は第一部隊を呼び出した教官のツバキに呼ばれたわけでは無く、任務の間なだけだつたりする

「説明は以上だ。何か質問はあるか?」

第一部隊に今回の任務の説明が行われていた
任務のターゲットは“ヴァジユラ”、あの日ど同種のアラガミだった

説明を終えたツバキにコウタがおずおずと手を擧げる

「あの…アリサを今回の任務に出してほしいなつて…あれからずっと頑張ってるみたいだし…なんて」

「お前もか…他の者はどうだ?」

「…賛成です」

「俺も賛成だ」

ツバキの言葉に無口なソーマは何も言わなかつたがリンドウを含め全員が賛成していた、後はアリサ本人の意志だけである

ツバキが少し考えるような仕草をしてからアリサの目を見ながら問い合わせる

「…アリサ、今回の相手はこの間と同種だ。大丈夫か?」

「…行きます、行かせてください!」

「よろしい：無理はするなよ」

自分の意見が通つて嬉しいのか、思わずコウタがガツツポーズをする

「よつしゃ！俺達がいるから大丈夫だよ、な！」

コウタがそう言うがアリサは無反応で、後ろで寛いでいるヤマト達

の方に歩き出した

「ありがとうございます……ヤマトさん、貴方たちのお陰でここまでこ
れました……」

「俺は別に何もしていない。アリサ自身が自分の“意志”を持つてい
たからだ」

「そうだよ、それにアリサはここからが“始まり”だから全員生き
残ること！」

「お姉ちゃん頑張つてね！」

「アナスター・シャさん、ナナちゃん……はい！」

アナスター・シャの言葉に元気をもらつたアリサは力強く頷いた
「アナスター・シャ、ナナ。俺たちも時間だ、行くぞ」

「はい」

「わかつた！アリサ、頑張つて！」

アリサ：第一部隊に背を向けヤマト達3人は任務へと歩き出した

「ヤマト、お前達も無事で何よりだ」

ヤマト達3人が任務から戻つてくるとソーマを除く第一部隊の
面々がエントランスのソファードで座つていた

「お疲れ様です、リンンドウさん。そちらも……無事、ヴァジュラを討伐
できましたんですね」

「まあな……ところでお前、ユウとアリサをどんな鍛え方したんだ?二
人の動きがベテランレベルだつたぞ?」

「そうね、私も聞きたいわ」

欠員無しで帰つてきた両部隊をそれぞれ労うとリンンドウがヤマト
が鍛えたユウとアリサのことを聞いてきて、同じく気になつっていたサ
クヤもリンドウに同意するように聞いてきた

「連日任務に連れ回して二人で熟してもらつただけですよ」

「本当のような嘘言わないで下さいよ!?連日連れ回されたのは本当に

すけど、何度も死にかかったと思ってんですか!?」

「どうしたことだ、ヤマト?」

アリサの“死にかかつた”を聞いたからカリンドウが普段よりも低い声でヤマトに聞こうとした

「大きさだな、アラガミも数もお前達二人を正確に評価して二人なら熟せる範囲で集めたんだ。それにハガンやテスカみたいな二人に荷が重いのは俺が処理しただろ?」

「それでも、オウガテイル20体やグボロ・グボロ3体は多過ぎだよ、僕達まだ新人ですよ?」

リンドウもサクヤもオウガテイル20体と聞いて顔色を少しだけ変えた

オウガテイルはアラガミの中でも出現率が高く、新人が実戦として最初に討伐するアラガミもある

だが、オウガテイルは年に何人もの神機使いを喰らい殺しているこの極東支部でも記憶に新しく中堅のエリックもその一人だつた「唯の新人なら最初の任務で俺達が手を貸してるからな?アリサが復帰直後とはいっても二人で熟せたんだ。ユウに関しては隊長になるのも近いかもな?隊長格なんて何人居ても足りないからな。ここは特に」「いくらなんでも、早すぎません?」

「そうでもないだろ?ユウくらい優秀なGOD EATERは各地でほしい。隊長になれる素質を持つのも多くは無いからな。優秀な新人は早めに隊長にして経験を培つてほしいと思つてる奴もいるからな」

冗談のようにユウの隊長になれるかもしれないと言つたがユウ本人もそんなことは無いと思っていた

「ヤマトさんも隊長になれるのでは?接触禁種のアラガミを3人でかなりの数倒してますよね?」

「俺は隊長になる気は無いがな。それに俺はやることを終えれば神機使いを辞めて技術者に戻るつもりだ」

【え?】

ヤマトの「技術者に戻る」と言う言葉に第一部隊の面々は驚きを隠

せなかつた

「俺は根っからの技術者なんだ。アリサとユウは知ってるだろ?」

「そ、そう言えばそうでしたね」

アリサとユウはヤマトに連れて行かれた任務のことを思い出して苦笑いするしか無かつた

「まあ、技術者に戻つても戦闘はできるからな、たまには素材狩りに出ることになるだろうし、有事の際は極東支部の守りにはなるさ」

アラガミを素材呼びできるのはこの世界何処を捜してもヤマトただ一人だけだろうとこの場の全員が心の中で思っていた

続く

パーティー

「おい、ソウ」

「ソーマさん？珍しいですね、そつちから声をかけてくるなんて」「そんなことはどうでもいい、お前達は外で…特に寺院で視線を感じたことないか？」

ミッショング終わり、自室に戻ろうとしたヤマトにソーマが珍しく声をかけてきた

「アラガミ以外のつてことですよね？確かにリンドウさんを救出時の黒いヴァジュラ…デイアウス・ピターの戦闘から視線を感じることはありますね。敵意じやなく、興味みたいな視線を」

「やつぱりお前もか…そいつは彼奴がオレを使つてずつと搜している物かもしれない……誰にも…」

「忘れたのかソーマ？俺が彼奴のことを嫌いだつてことを？」

彼奴と聞いて普段はあまり表情を変えないヤマトが変貌を遂げ、普段“さん”付けするソーマに対しても呼び捨てにしていた

「ツ……そうだつたな、邪魔をした」

ソーマも変貌したヤマトに後ずさりし一言謝り帰つて行つた

「これで終わりだな」

10日後、ヤマト達3人はいつも通りにミッショングを終わらしていった

ヤマト達の周りにはシユウ神族が10体、切り捨てられていた
「そう言えばお兄ちゃん聞いた？今極東支部周辺でアラガミの目撃数が減っているんだって」

「時期的に私達が極東に来てからだから私達が原因じゃ無いかな？」
「原因なんて失礼な。禁種を相当数狩ったのは事実だけどな」

そう、ヤマト達が極東支部に来てから数ヶ月、アラガミの目撃数が徐々に減つており、民間、神機使い問わず死亡数がかなり減っていたのだつた

それもそのはずでヤマト達3人が接触禁忌種を片つ端から狩り、アラガミの活性化が起こりづらくなる中、第一部隊に優れた新人が配属されたからであつた

「それよりも早く帰つて支度するぞ。今日は“特別”な日もあるんだからな」

「はーい」

3人は何か急ぐように極東支部に戻つていった

「えー、なぜか音頭をとることになりましたが……ユウ！ 隊長昇格おめでとう！ 乾杯！」

【カンパーア!!】

数時間後、ヤマトの部屋でちよつとしたパーティーが行われていた
ヤマトの部屋には第一部隊の面々とナナ、アナスター・シャが揃つて
おり、意外にもソーマも参加していた

ヤマト達がミッショーンを終えて直ぐに極東支部に戻つたのはこの
パーティーの準備をするためだつた

「ヤマトが作ったお菓子はサクサクしてうまいな、配給品と段違い
じゃ無いか？」

「ありがとうございます、リンドウさん。大昔にここが“日本”と呼ばれていた頃の“ポテトチップス”を再現してみました。まだ、栽培が安定して無くてあまり量は採れてないですが近いうちに“ジャガイモ”だけは極東だけでも配給できるように改良をするつもりです」「そ、そうなのかな……あまり無理をするなよ?」

「程々にしておきますよ」

ヤマトがテーブルに並べた御菓子はこの荒廃した世界で作れる人

は作るクッキーやパンケーキ以外にも今回のために再現した“ボーテチップス”に“ポップコーン”にいろんな種類のケーキが並べられていた

「それにしてもヤマトさんは凄いですよな！、ユウが隊長になるのを預言していたみたいに！」

「ユウの実力があれば近いうちになるのは予想が付くからな。あの話から二週間もしないうちになったのは予想外だがな」

このパーティーが開かれたのはヤマトがアリサと一緒に鍛えたユウが第一部隊第二隊長に任命されたからだつた

本当であれば新たに別部隊を編成しユウをその部隊の隊長にするのではあるがユウは隊長になつたとしても数ヶ月前に入隊した未だ新人で指揮の経験など無いのと他、中堅神機使いが嫉妬などで問題が起ころ可能性を上層部（ツバキ教官、サカキ博士、支部長）で検討し一先ず第一部隊の第二隊長としてリンドウに指揮のノウハウを教えてもらうことになった（b y ツバキ教官）

「ですが、リンドウさんに指揮のノウハウをつて大丈夫なんですか？」
サクヤさんに教えてもらった方がいいのでは？」

「あら、確かに言えてるわね。リンドウ、隊長として頼りないものね」「ヤマトもサクヤも酷くないか？」

「それなら報告書を俺に書かせないで下さい。」「書類仕事私もよく押しつけられるのよね」

ヤマトとサクヤの二人に報告書をそそこの頻度で書かせていたことを第一部隊とナナ、アナスター・シヤの前で暴露されリンドウはバツの悪そうにお酒を飲むのであつた

そして、アラガミの出現での呼び出しも無くパーティーは二時間で終わりを迎える、各々部屋を後にする

「ユウ、少しいいか？」

ユウも帰ろうとしたところをヤマトに止められ、アリサとコウタを先に戻るように伝える

「隊長になつたお前に言つておきたいことがある。支部長には心を許すな」

「支部長を……？」

「そうだ、理由は話せないし話すつもりは無いが、それだけは覚えていてほしい」

「……わかりました」

ヤマトが話さないと言うことはアリサとの過去にも関わる大事なことだと悟ったユウは頷くと部屋を後にした

続く

少女と名前と重荷

とある日、ヤマト達3人は第一部隊のリンドウとソーマと共にサカキに呼ばれ、ラボに着いた途端に鎮魂の廃寺までの護衛として連れていかれ、ミツション終了直後の残りの第一部隊の面々と合流、ミツションのターゲットアラガミであるシユウのコアを取らずにそのまま隠れると色白の少女が現れシユウを補喰し始める

色白少女に接触し極東支部のラボまで連れてくるとサカキから爆弾が投下される

「あの…博士…今なんて…？」

「何度も言おう。彼女はアラガミだよ」

サカキから投下された爆弾は色白少女の正体は“人に近づいたアラガミ”であり、以前から支部長とサカキはそれぞれ別に捜していたことだった

“アレ”が捜していることはこの子のコアは碌でもない代物なんだな？」

「そうだね。君の想像通り向こうに確保されたら大変なことになるね」

“アレ”や“向こう”と言葉を濁すヤマトとサカキの意図に気がついたのはアナスター・シャとリンンドウ、ソーマの3人だけだった

それから数日後

「オハヨウ！」

「ああ、おはよう」

極東支部のアラガミが大分減っているためヤマト達や第一部隊の面々は非番が多くなりその分、サカキのラボに浸りつつアラガミの少女と頻繁に接觸していた

アラガミの少女は言語をこの数日で大分吸収しかなりの成長を見せていた

「サカキ博士、大分この子も人らしく言葉を覚えましたね」

「君たちが毎日ここに通つてくれたからだろうね。私も彼女の成長速度には驚愕しつぱなしさ」

そんなことを言つているサカキの眼は研究意欲からかギラギラしていたのをヤマトは見逃さなかつた

「それで、俺たちと第一部隊の勢揃いで呼んだのは何か理由が？」

今まで暇があれば來ていたところを今回はサカキに全員呼ばれていたのだつた

「この子の名前をつけて欲しいんだよ。いつまでもこの子、あの子では可愛そだからね」

「ふつ……オレ、こう見えてもネーミングセンスには自信あるんだよね……」

「……嫌な予感しかしないんですけど……」

「同じく」

アリサの予感はヤマトやユウ、アナスター・シヤも感じて、ユウは止めようと試みるが、コウタには意味を成さず：少し溜めを入れてから、自分が考えた名前を口にしてしまう

「そうだな、たとえば……ノラミとか」

「……」

コウタがドヤ顔で名前を口にした瞬間、部屋の温度が氷点下まで下がつた

その場に居た全員が「それはない」と言おうとし言い止まつたそんな時……

「……どん引きです」「……それはなき過ぎ」

コウタに容赦がないアリサとアナスター・シヤだけは、絶対零度の冷たさを孕んだ声で、言い放つた

「何だよー!! ジやあアリサとアナスター・シヤは何か良い名前でも思付いたのか!?」

「な、何で私がそんな事を……！」

「……」

「ははーん……さては自分のセンスの悪さが露見されるのが恐いんだろ

な?
」

コウタの反撃開始、先程とは立場が完全に入れ替わり、アリサとアナスター・シャは慌てふためき考えようとする

「え、えーと……ユウヒリンドウさんは何かいい名前とかありますか！」

「おつ？」

「ヤトも何か無いかな!?」

「こう!! 可逃げてゐんぢよ!!

「に、逃げてませんよ。私はただ部下として隊長であるリンドウさんとユウの意見を訊こうと思つただけです！」

「うに押しつけただけじゃん!」

二二ウタ 僕なら兎も角とは酷くないか?」

部下の二や外は若干テヘテられ肩を竦めるリントムをサクヤがなだめる中、部屋の隅にいたソーマに近づく小さな影…

二二

「ソーマお兄ちゃん 何か隠してるよね?」

「うん、嘘。ソーマお兄ちゃん

てたよ？

この場での最年少のナナに嘘を見抜かれたソーマ、ソーマの嘘を見抜く方法をナナに教えたヤマトを睨み付けた……そんな時だつた

アラガミの少女が自分の名前ほいのを元気に口にした

「それか君の名前かい？」

「お、おいお前!」

既にソーマによつて名前がつけられていたアラガミの少女、シオが

ソーマが隠そうとしていた爆弾を破裂させた

「そつが、シオちゃんって言うんだね！私はアナスターシャ、ターシャと呼んでね！」

「ターシャ！よろしくな！」

ソーマをアリサとコウタが茶化そうとする前にアナスターシャがシオに話しかけて自己紹介するとアナスターシャにシオが抱きついた

「ここに来てからアナスターシャに異様に懷いてるよな？」

「そうですね、ヤマトさん達はシオちゃんに会つたことが？」

「いや、視線を感じたことはあつたこの子……シオに会つたのはあの時が初めてだ……」

ラボに来てから毎日のように誰かどうか来ておりそれぞれさほど頻度が変わらなかつたがなぜかソーマとアナスターシャの二人には他のメンバーに比べて早く、アナスターシャに限つては会つたその日に懷いているようだつた

「多分、彼女にとつてアナスターシャ君が近い存在だからじやないかな？」

「ツ!!」

「え……」

「どういうことだ？」

「アナスターシャ君のデータだけ毎回ヤマト君がとつていたからね、何かあると思ひ極秘裏に調べさせてもらつたら、驚くことにアナ斯塔ーシャ君の身体の一部がアラガミ化していたんだよ。それに詳しく調べたらアラガミ化が徐々に進行していることもね」

サカキの言葉にこの場の全員が静まり返つた、ヤマトとアナスター シヤ、ナナの中でも秘密にしておいたほうが良かったことをサカキは平然と語る

「博士、あまりその辺のことを言わないで下さいよ。私の中でも極秘中の極秘なんですから」

「すまないね、気になつたら調べたくなる研究者の悪い癖でね」

「まあ、いいですよ、何れは話さないといけないとは思つていましたか

ら……バレたから話しますけど誰にも言わないでね？」

研究者の悪い癖はアナスター・シヤもよく知っていたからか溜息1つでサカキは許されたのだった

アナスター・シヤは第一部隊の面々に一言言うと話し出した

「私はほんの半年くらい前までみんなと同じ神機使いだつたんだ。何処の支部かは言わないけど、日々アラガミを倒すための力を培つていった。ある日のミッション中に想定外の大型種に出くわして仲間を逃がそうとして……」

「凶になつたと…………」

「うん。そして、戦闘中に腕輪を破壊されてアラガミ化が始まつて激痛で動けない私を目の前のアラガミが補喰しようとしたときにその場に居合わせたヤトが助けてくれたんだ」

アナスター・シヤは一部を隠して本当のことを話し出した、ここで嘘をついても余り意味が無いからでもあつたがここにいる面々には信頼を寄せていたからでもあつた

「大型種からは助かつたけど、アラガミ化は止められて無かつた。その頃、ヤトが研究、開発していたアラガミ化を抑制する布で今もこうして人として生きてるんだ……布は抑制するだけだから博士が言ったように少しづつアラガミ化は進行してる」

「布の効力も今では1週間続くが最初の頃は1時間くらいしか保たなかつた。アラガミ化に遭遇するなんてことも普通はありえない、アナスター・シヤを助けたのと同時に人体実験のモルモットにした、それは今も変わらないが……」

ヤマトとアナスター・シヤは平然と話していたが第一部隊の面々にサカキは耳を疑うような話がチラホラあつた

「黙っていたのは簡単に信用信頼の問題では無くてあまりいい話じや無いからなのとおいそれと人に話せないから……いや、話したくなかったかな。アナスター・シヤが……」

「うん。ヤトとナナちゃんに背負わせてる重荷を他に背負わせたくないなら……」

「重荷……ですか？」

黙つて聞いていたアリサが “二人に背負わせた重荷” と聞いて聞
き返した

アナスター・シャは深く頷いてこう言った

「アラガミ化は止まつていない。いつか必ず私はアラガミになつて周
りを襲う……だから私は、ヤトとナナちゃんに私がアラガミ化したら
二人の手で殺してほしいって重荷を背負わせた…」

「「……ッ!!」」

「……」

“アラガミ化した自分を殺せ” 言うことは簡単だろう。だが、もし
その時がきたらどれくらいの人が言われた通りに出来るだろうか
……家族と言つて差し支えない人をアラガミ化したからと殺せるだ
ろうか……だからこそアナスター・シャは “重荷” と言つていたの
だった

「みんなには出来る? アラガミ化した私を

殺せる?」

続く